廣田先生の銅像の前で、厳粛に斎行された顕彰祭

**館　報**
玄洋131号
平成30年9月1日
発　行
一般社団法人
玄洋社記念館
郵便番号 810-0062
福岡市中央区荒戸三丁目
6番36号
西公園ハイツ201号
電話（092）762-2511
FAX（092）762-2502

**玄洋社憲則**

第一条　皇室ヲ敬戴ス可シ
第二条　本国ヲ愛重ス可シ
第三条　人民ノ権利ヲ固守ス可シ

## 生誕140年 没後70年

# 廣田先生顕彰祭を斎行

## 敬仰の念ひときわ深く

福岡県が生んだ悲運の宰相、廣田弘毅先生を慰霊し、ご偉業を顕彰する「廣田弘毅先生顕彰祭」が五月十九日、福岡市中央区城内五の廣田先生の銅像前で催された。

一般社団法人玄洋社記念館の主催。玄洋社記念館会員、福岡市議会の「玄洋社に政治を学ぶ議員の会」会員はじめ地元政界関係者、廣田先生の崇敬者ら約三十人が参列した。

廣田先生の生誕百四十年、没後七十年という節目の年の慰霊祭であり、参列者は廣田先生への敬仰の念を、ひときわ深くしていた。

「顕彰祭」は、福岡縣護国神社の神職により執り行われ、祝詞奏上、玉串奉奠などの神事が厳かに進められた。筑前琵琶保存会会主、青山旭子師と弟子の高木青鳳さんが、銅像の廣田先生に向けて北川晃二作詞「廣田弘毅」を献奏した。

「顕彰祭」を終わって玄洋社記念館の吉村剛太郎理事長は「（昭和十一年の）二・二六事件の混乱の中で廣田先生は大命降下を受け総理に就任された。わが国は内外に大きな問題を抱えていた。現在の政治状況を考える時、廣田先生のご偉業を私たちは思い返さなければならない」と述べた。

廣田先生は明治十一年二月十四日、現在の福岡市中央区天神三丁目十六番で誕生。東京国際軍事裁判でA級戦犯として訴追され、昭和二十三年十二月二十三日、文民でただ一人死刑に処せられた。

**今号の主な内容**

▽筑前琵琶の寺田さん「平野國臣」をうたう＝**2面**
▽最後の招魂祭を斎行＝**3面**
▽平成30年度賛助会員芳名録＝**4面**
▽連載・西郷隆盛は征韓論者にあらず＝**5面**
▽司書公たたえて「桜の宴」＝**7面**

# 國臣生誕190年
# 平野神社で祭典

福岡が生んだ勤王の快男児、平野國臣の生誕祭が三月三十一日、福岡市中央区今川一丁目の「平野神社」で催された。

今年は生誕百九十年に当たる。國臣の子孫や崇敬者、神社庁関係者ら約五十人が参列した。

山内勝二郎名誉宮司を祭主に、慰霊、顕彰の神事があり、詩吟が奉納された。

神事を終えて、近くの鳥飼八幡宮参集殿に会場を移し、直会(なおらい)が開かれた。出席者は、酒肴（しゅこう）を楽しみながら、尊皇倒幕、国家統一に奔走し、明治維新の四年前に禁門の変の混乱に乗じて、京都の六角の牢で斬殺された國臣の熱い心情に思いを馳せた。

國臣の偉業が語り合われた生誕祭の直会

國臣の玄孫で、大阪・豊中市から駆けつけた原国俊氏（69）は次のように挨拶した。

「國臣が、もう少し生きていれば明治維新を見ることが出来たと思うと少々残念な気がする。今、国際情勢には厳しいものがあるが、私たちは平和でいい時代を過ごさせてもらった。私たちは先人の知恵を大切にしなければならないと思っている」

生誕祭に、福岡県柳川市在住で、国俊氏の弟、猛彦氏（66）も参列された。

平野神社は昨年末、山内名誉宮司が宮司職を退任して名誉宮司となり、子息の圭司氏に譲った。生誕祭の祭主を務めるのも今回が最後になる。

山内名誉宮司は「私も、父が宮司を私と交代したのと同じ年頃(七十七歳)になり、そろそろ交代の時かなと考えた。おせわになりました。今後は息子をよろしくお願いします」と礼を述べ、圭司宮司は「若輩ですがよろしくお願いします」と挨拶された。

## 寺田蝶美さん
## 「平野の最期」を演奏

筑前琵琶奏者で筑前琵琶保存会師範の寺田蝶美さんが、五月十五、十六の両日、福岡市中央区今川二丁目の鳥飼八幡宮で開かれた「第一回福岡歴史茶房・平野國臣生誕祭」で「平野の最期」を演奏した＝**写真**。

寺田さんの祖母、内田旭潮さんが残した楽譜の、難解な文字を解読してよみがえらせた曲。

…斯くて國臣勤王の旗を生野の山風に…生野の変で敗退し捕らえられて六角の牢で斬殺されるまでを、怒濤のような迫力で語る寺田さんの二十分に及ぶ演奏は、約七十人の聴衆を圧倒した。

寺田さんは進藤一馬先生の「桧原桜」の逸話も琵琶曲にしている。

# 筑前風濤録
## 頭山満と玄洋社
〈15〉
柳　猛直
題字は進藤一馬福岡市長

### 試練の時代

志士は諸国を遍歴してさまざまの情報を手にしていたので情報屋として諸藩の首脳から地方の豪家に至るまで尊重されていた。

長溥公の東上を迎えて平野の活躍が始まる。文久二年四月十三日、黒田長溥は播磨大蔵谷（現在・明石市内）の宿所に入った。この宿所に平野は薩摩の伊牟田尚平を伴ってあらわれ長溥公に伺候する。伊牟田は島津久光からの要請であると偽って長溥公が尊王攘夷の魁（さきがけ）となられることを勧める上申書を差し出した。長溥が、そんなものに騙（だま）されるはずはない。彼はもともと開国論者であり公武合体論者である。京坂に充満している不穏な空気にまき込まれて担がれたり、あるいは逆に襲撃される危険すらあった。

長溥は大蔵谷から急遽引き返す。幕府には持病が急に悪化したので、やむを得ず引き返すという届けを出しているが江戸屋敷への書状には、一旦は参府と決めたけれども「衆評の上、引返し候」とあり「何分深き意味これあり認（したた）め難く候」、手紙では言い難いことがあるのだと言っている。

なおこの〝大蔵谷回駕〟の際に平野国臣はお供の列に加えられている。脱落の身が供の列に加えられたので平野は大いに得意だったようだが、こ

明治十年福岡の変

# 明道会　最後の「招魂祭」を斎行

## 「東公園」建碑から139年の歴史

①最後の斎行となった平成30年の「招魂祭」

②昭和10年4月21日、東公園招魂所での招魂祭

西郷隆盛の「西南戦争」に呼応して決起し散華した、旧福岡藩の青年士族を慰霊、顕彰する「明治十年福岡の変・招魂祭」が一般財団法人「明道会」の主催で六月三日、福岡市南区平和の平尾霊園「魂の碑」苑で斎行された。毎年恒例だった招魂祭の最後の斎行だった。

招魂祭には、玄洋社員　岡市中央区天神）の前田遺族や明道会、玄洋社記　安文宮司を祭主に、祝詞念館関係者ら約二十人が　奏上、玉串奉奠などの神参列した。警固神社（福　事が厳かに進められた。

終わって明道会の山崎拓理事長の挨拶に続き、明道会評議員の波多江健一氏（明道館館長）から招魂祭の終了が報告された。

波多江氏は「東公園（福岡市博多区）の『福岡の変碑』が昭和三十八年から平尾霊園に移設され『魂の碑』になって五十五年になる。福岡の変のご遺族の出席も少なくなった。招魂祭は今回で終わりにしたい」と述べた。

### 玄洋社先覚らが官許を得て建碑

明治十年三月二十八日に決起し、散華した青年士族は自刃、刑死、獄中死などを合わせ百三人といわれる。

明治十二年十一月、玄洋社三傑と呼ばれる頭山満、箱田六輔、平岡浩太郎はじめ進藤喜平太ら玄洋社の先覚は、官の許しを得て東公園（福岡市）の一角の「千代松原」と呼ばれる所に、青年士族の志を後世に伝える碑を建て「千代松原招魂碑」と名付けた。百三十九年前である。碑が建立された場所は「玄洋社十年役招魂所」と呼ばれ、これから玄洋社員による「招魂祭」が始まった。

戦前は玄洋社が、玄洋社解散後は玄洋社の流れをくむ人々や明道会によって「招魂祭」は営まれてきた。

東公園に児童遊園の建設計画が持ち上がり「招魂所」は「平尾霊園」に移転することになった。昭和三十八年十二月から「平尾霊園」で建設工事が始まり、頭山翁の「魂」の文字を掲げた「魂の碑」を中心にした招魂の場が完成した。

---

れは京坂に集まっていた尊攘志士たちに対するジェスチュアであったようで筑前近くまで来た船中で平野は突然逮捕され朽木屋の牢に放り込まれてしまう。脱藩して過激の論をふりまいた罪である。

福岡藩の女性勤王家・野村望東尼は平野の逮捕を聞いて

たぐいなき　声に鳴きつるうぐいすも
籠（こ）に住む憂き目　見る世なりけり

という歌を贈っている。感激した平野は早速、返歌を詠むのだが牢内では筆墨が用いられないので、こよりを作ってこれを紙に貼り付けた。

おのづから　鳴けばぞ籠にも飼われぬる
大蔵谷の　うぐいすの声

忘れても　わがかぞいろ（父母）の国のため
あしかれとしは　つゆ思わなくに

国臣は文学的な才能も豊かな人であった。

黒田長溥が大蔵谷から引き返し、平野国臣が一行に加わって筑前に向かっていたころ伏見の船宿「寺田屋」には過激派の尊攘志士が集結していた。中心は薩摩藩士で、これに久留米水天宮の神官・真木和泉以下久留米の志士十名、中山忠能の諸大夫であった田中河内之介などがいた。

彼らは京都所司代・酒井忠義や朝廷における幕府の代弁者・関白・九条尚忠を襲って攘夷の血祭りにあげ、その混乱に乗じて事を起こす計画であると聞いて島津久光は愕然（がくぜん）とする。

そんなことをされては彼が抱いている公武合体の構想は根底から覆されてしまうだろう。久光は寺田屋に鎮撫説得の使者を出す。聴き入れぬ時は斬れという討手である。

藩士の中でも腕の立つ奈良原喜八郎、大山格之助（綱良）、江夏（こか）仲左衛門、道島五郎兵衛等九人の士が選ばれた。

# 賛助会員芳名録

平成30年度

## 6月30日受け付け分まで（敬称略）

### ▼法人・団体の部

【三万円】

警固神社（福岡市）
九州第一工業㈱（同）
㈱玄南荘（同）
㈱エー・ケー・シー（東京都）
㈱正興電機製作所（福岡市）
㈱アキラ水産（同）
駿和物流㈱（同）
東海大学（東京都）
社会医療法人原土井病院（福岡市）

### ▼個人の部

【三万円】

上田藤兵衛（京都市）
吉村剛太郎（福岡市）
花田　勲（東京都）

【二万円】

大江田　信（太宰府市）
妹尾　俊見（福岡市）

【一万円】

山座　和基（福岡市）
小野里耕作（東京都）
頭山　興助（同）
小無　光夫（大阪市）
藤田　道子（福岡市）
塚田　征二（同）
堺　弥蔵（同）
堀内　恭彦（同）
濱地勝太郎（栃木県下野市）
工藤　慶（西宮市）
山田　真（筑紫野市）
濱地　光男（大府市）
松野尾英彦（北九州市）
平山　康樹（春日市）
谷本　憲彦（広島市）
三木　年史（徳島市）
室　潔（東京都）
中本　零時（同）
梅本　真央（福岡市）
西本　潤也（同）
箱田　満輔（小平市）
中村　佐枝（福岡市）
上杉　清文（静岡県富士市）
平湯　芳裕（名古屋市）
矢島　隆禅（川越市）
戸高　有基（津久見市）
坂牧　大陸（福岡市）
山内　圭司（同）
堤田　智（同）
魚谷　哲央（京都市）
島津　修久（鹿児島市）
庵原　義一（古賀市）
淵上　貫之（東京都）
妹尾　正為（福岡市）
櫻木　嵩士（徳島県阿南市）
三原　朝彦（北九州市）
西嶋　俊成（福岡市）
池内　公子（北海道遠軽町）
武田　熙（さいたま市）
梶原　昂（福岡市）
有馬　學（東京都）
秋吉　謙一（久留米市）
横田　進太（福岡市）
堺　彪（同）
荒津　茂徳（愛知県日進市）
興膳　克彦（中間市）
木戸　龍一（糸島市）
進藤　勇（府中市）
生武　治（福岡市）
白石　敏彦（武蔵野市）
二之湯　智（京都市）
縄田　智行（福岡市）
福田　明彦（同）
中原　博司（同）
内藤　武宣（東京都）
国松　誠（藤沢市）
箱田　大輔（さいたま市）
小野　勇夫（福岡市）
原　祐一（同）
近藤　繁一（同）
岩崎　成敏（同）
大原　毅（同）
田中　久也（同）
後藤　元生（同）
山城　直之（同）
西方　忍（同）
草野　和子（松戸市）
柴田　文彦（福岡市）
酒井　智堂（鹿児島市）
土肥　國夫（福岡市）
中井美佐子（松戸市）
大島　泰治（大野城市）
富田　幸一（熊本県人吉市）
柴田　文雄（福岡市）
高場　康幸（福津市）
坂上　英雄（大阪市）
光安　力（福岡市）
おばた久弥（同）
南原　茂（同）
森　英鷹（同）
冨永　計久（同）
川上　晋平（同）
打越　基安（同）
平畑　雅博（同）
阿部真之助（同）
今林ひであき（同）
大原弥寿男（同）
大森　一馬（同）
津田信太郎（同）
川上　陽平（同）
調　崇史（同）
堤田　寛（同）
鬼塚　昌宏（同）
稲員　稔夫（同）
藤本　顕憲（同）
笠　康雄（同）
国分　徳彦（同）
浜崎　太郎（同）
川口　浩（同）
吉武　義和（防府市）
吉武　健志（同）
鬼木　誠（福岡市）
小石原　昭（東京都）
山崎　登（同）
頭山晋太郎（同）
池尻　昭文（福岡市）
長岡　聖司（同）
鴛海　量良（立川市）
進藤　訓子（福岡市）
箱田　克輔（狛江市）
小柳　政則（福岡市）
箱田　慎二（神奈川県寒川町）
久恒　政雄（福岡市）
林　登（同）
末永　正彦（東京都）
青柳　紀明（福岡市）
川﨑　賢治（同）
小野里耕作（東京都）

**※早速のご協力に感謝致します。本年度も、よろしくお願い致します。**

**玄洋社記念館**

## 「中野正剛先生顕彰祭」を開催

本年の「中野正剛先生顕彰祭」を、次のとおり開催します。どなたでも参加できます。参加希望者は、中野正剛先生顕彰会事務局へ電話またはFAXで早めにお申し込みください。

**◇日　時**　平成30年10月20日（土曜日）午前11時開始

**◇場　所**　鳥飼八幡宮境内「中野正剛先生銅像」前（福岡市中央区今川2丁目1-17）
雨天の場合は同宮参集殿

**◇参加費**　式典だけ参加の方は千円、直会（なおらい）にも参加の方は、ほかに3千円。

**◇電　話**　092・762・2511

**◇FAX**　092・762・2502

**中野正剛先生顕彰会**

# 西郷隆盛は征韓論者にあらず ②

（昭和六十一年四月発行「玄洋」特別号外版より再録）

## 誤認の歴史を改めさす為に〈1〉

葦津珍彦

日本の外交にとって、最も大切なのは隣邦韓国との間である。日韓の政府間の外交史は、遠く千五百年の古きにさかのぼるが、人民と人民の間の交流は、さらに遠く古い。その歴史の間には、両民族の間の明るい友好の歴史があるとともに暗い不幸な歴史があるのも否定しがたい。歴史の真実を、後の時代になって改めることはできない。

しかし、暗い不幸な歴史とされているものの中にも、事実を誤認して伝えられているものが少なくない。それはぜひ改めねばならない。その一つとして西郷隆盛征韓論史というのがある。

西郷は、近代日本で、今も日本の大衆に大きな人望のある巨人である。その西郷が、侵略的征韓論の巨頭だったという誤認の歴史は、ぜひ改めなければならない。私は、この歴史の誤認は、確実に実証資料で、根本からその誤りであることを立証し得るものと信じている。それは、日本外交思想史の上でも大切と思う。

### 新時代外交のトラブル

西郷隆盛は、決して征韓論者ではなくて、その反対の思想を堅持したことを私は論証する。しかし明治初期に、日本人の間にいわゆる征韓論と称する政策論争のあったという事実を否定するのでは決してない。その征韓政策論なるものがどんなものだったかということから話したい。

維新にいたる前の徳川政権の約二百有余年は、日韓ともに似たような鎖国政策を保って来たが、韓国は、清国と日本に対してのみは、国交を続けてきた。約二百年有余の間、さしたる波乱もなく平和友好の時をすごした。いずれも東洋文化の国で、産業革命依頼、新しい力を得て東方に新しい植民地を獲得しようとして、進出して来る西洋列強を嫌って、鎖国の扉を固く閉じていた。

その国際認識には似たものがあった。韓国のある評論家が、その鎖国の歴史を評しながら、たゞ一つ日本は鎖国しながらも、長崎の一地区にオランダ人を入れて、わずかながらも、西欧近代化の国際情報知識を入れていた。韓国には、それがなかった。日本へのオランダを通じての情報知識は、量は少なくても、後世から見ても、かなりに確度の正しいものとして評価される。韓国が全く長崎のオランダ商館に似たものを持たなかったことで、急流のような維新前約二十年間の、国際情況についての認識に決定的な開きができたとの指摘は大切だ。

徳川時代の日本人は、西欧列強の東洋制覇の野望を見て鎖国し、やがて攘夷の思想が高まった。その思想推移は、おそらくどこの東洋人（韓国人）も同じである。それは当然の自国防衛本能である。

たゞ日本人は、主として長崎情報等で、産業革命以来の工業、軍事、経済力について東西の格差の大きさを知って、鎖国では独立防衛ができないと知った。攘夷の精神を「独立確保の決意」として温存しつゝも、政策的には開国して、外来の近代文明を急いで学び、自らを強化しなくてはならないと知った。

（次号に続く）

建設コンサルタンツ
建設事業の計画・調査・測量・設計・施工管理
ジーアンドエス・エンジニアリング株式会社
代表取締役会長　花田勲
代表取締役社長　児玉和久
本社　福岡市博多区東比恵三丁目二四－九
〒八一二・〇〇七電話（092）481－3100
東京支社　東京都杉並区高円寺南一－二三－一
〒一六六・〇〇三電話（03）5378－5800
営業所　千葉・浦和・神奈川・山口・佐賀・北九州・大分・長崎

福岡鮮魚市場のコア企業!!　21世紀の水産業界を領導するアキラグループ
◇鮮魚仲卸業◇
株式会社アキラ水産
代表取締役社長　安部泰宏
本社　福岡市中央区長浜3丁目11－3－711
電話092－711－6601（代表）
関連会社／株式会社コウトク水産
AKIRA Oh, Fresh! Sea foods.

学生会館（学生寮）・単身者向け事業
受託給食・F&B（レストランサービス）事業
株式会社玄南荘
代表取締役社長　渕上高当
本社　福岡市中央区荒戸二－三－四－一
TEL〇九二－七一－五－六七－一一
FAX〇九二－七五－一－〇六一三
HP http://gennanso.com/
MAIL fukuoka@gennanso.com

造園・緑化　自然とコミュニケーション
株式会社別府梢風園
代表取締役社長　別府壽信
本社　〒813-0025 福岡市東区青葉一丁目六－五三
TEL〇九二－六九一－〇六七八（代）
FAX〇九二－六九一－四五五四
E-mail：info@shoufuen.co.jp

（財）日本医療機能評価機構認定
HARADOI HOSPITAL
原土井病院
――開放型病院・臨床研修指定病院――
理事長　原寛
〒813-8588
福岡市東区青葉6丁目40番8号
☎092-691-3881（代）
http://www.haradoi-hospital.com/

寄稿

## 西郷隆盛、高杉晋作会見の証言者

# 筑前勤王党・林元武

明治維新史学会会員　力武 豊隆

幕末、民族の危機を救うため、「憂国の志士」があいついで政治運動に身を投じた。そのため囚われて処刑、獄死、時として訊問もなく惨殺された。また騒乱により戦死、あるいは自決した。その数、二五〇〇人に達する。

それも「ペリー来航」から「大政奉還」までの十五年、しかも宮内省編『補修殉難録稿』(昭和八年)に事績を収録されている者に限っての話である。平野国臣、加藤司書、月形洗蔵ら福岡藩三十九人も、この中に含まれる。

いっぽう、劣悪な獄中生活を耐え抜き、赦免出獄、晴れて名誉回復の日を迎えた人々がいる。ここに紹介する林元武もその一人である。

○

天保十二年(一八四一)八月七日、林は福岡藩士馬廻組、林家の次男として生まれた。子どもの頃から「元気者」として知られ、長ずるや、平野国臣の赦免工作、悪徳商人斬殺、獄中同志の脱獄援助など果敢に活動した。

元治元年(一八六四)十一月、福岡に亡命した長州藩士高杉晋作と親交を結んだ。その後、藩使節の一員として下関や岩国へ派遣された。

慶応元年(一八六五)六月、藩主と勤王党との関係が破局する。七月二十一日、林は座敷牢に囚われの身となった。拷問に耐えかね、秘密を洩らす同志を罵倒し、藩主の変心を憚ることなく非難し、訊問者を閉口させた。

十月二十三日夕刻、桝木屋獄に連行された。あたかも、月形ら十四人の斬首執行の直後だった。同志の遺骸が無残に横たわる刑場をこれ見よがしに引き回され、獄に投ぜられたという。

「天道」が「邪」に組するはずはなく、快風一陣、「妖霧」は払われ、必ず「天日」を仰ぐ時が来る―、こう言って、林は獄中の同志を励ました。

慶応四年(一八六八)正月三日鳥羽伏見の戦いで、新政府軍が旧幕府軍を撃破し、大勢が決した。同十五日、天皇の元服を機に、大赦令が発せられた。二月三日、林らは一斉に出獄を命ぜられた。

家族近親者が歓喜して出迎えるなか、顔貌憔悴、別人と見まがうほどに衰弱した体を、友人の腕に支えられながら帰宅した。老父すでに亡く、兄も処分されていたため、一家の生活は困窮、ほとんど餓死せんばかりであったという。

その後、「関東征討外交方」として戊辰戦争に従軍、明治四年福岡県少参事、夜須郡区長、福岡中学(修猷館)校長などを歴任した。

晩年は東京神田の久松仙方に寄留、明治四十三年七月二日、胃ガンのため没した。享年七十。同月六日、正六位が贈叙された。

○

林には忘れられぬ思い出がある。「薩長連合」に先立つこと一年余り前、西郷隆盛は長州側と会談している。元治元年十二月十一日、下関大坂屋でのことである。この時西郷を迎えに、小倉へ渡海したのは林であった。

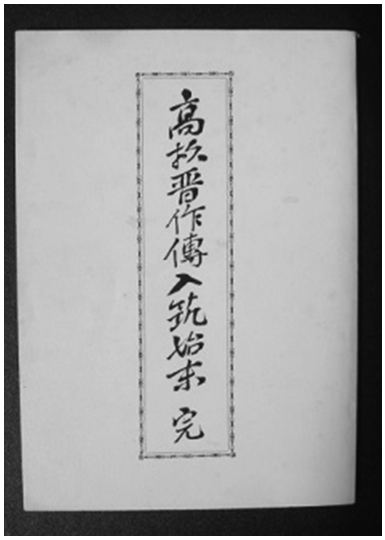
当時、朝敵として幕府の追討をうけようとしていた長州藩に、西郷は救いの手を差しのべようとしていた。月形はこの動きを高杉ら長州人へ伝え、対薩敵視を改め、薩摩藩と手を結ぶべしと、説得を重ねていた。大坂屋会談はその一環であった。

維新後、林は、「西郷と高杉が会見したのは、この時である」と証言した。これを詳しく聞き取った同郷の江島茂逸は、明治二十六年、自著『高杉晋作伝入筑始末完』、『維新起原大宰府紀念編完』で、その内容を公表した。特に後者は「天覧」に供されるという栄誉に浴した。その余勢を駆って翌年八月江島は、東京の史談会例会で、あらためて「西郷高杉会見説」をぶち上げた。

ところがこれにケチをつけた人物がいる。時の内閣総理大臣伊藤博文である。「近頃何とかという歴史談にもあるが、嘘の事だ」と言い放ち、自分はその頃、高杉と一緒にいたから、「知らぬ道理はないのだ」と否定した(末松謙澄編『伊藤井上二元老直話、維新風雲録』明治三十三年)。

薩長連合の先駆者、福岡藩の功績を世に知らしめようとした林らの企図は思わぬ壁にぶつかった。それでも林は死の前年、旧藩主家黒田長成侯爵へ「彼ノ薩長二藩ヲ握手セシメ」たのは「実ニ我旧福岡藩」の幾多の「英傑」であるとし、その事績の編纂出版に援助を請う歎願書を認めている。

大正七年公刊の『徳川慶喜公伝』が、編纂員の一人、福岡出身の藤井甚太郎の意見によるものか、「薩長二藩の和解」は、月形ら「筑前藩士の斡旋」に始まると、正当な評価を下したのは、泉下の林にとって、せめてもの慰めであった。




『高杉晋作伝入筑始末完』(表紙)。明治26年11月、東京の団々社書店と陽濤館から出版された。120頁、定価30銭。

## ご遺徳しのぶ「司書太鼓」

# ご別館の里で桜の宴

### 福岡県宮若市脇田

司書公をしのんで演奏された「司書太鼓」

明治維新の三年前、筑前福岡藩の勤皇派弾圧事件「乙丑の獄」で切腹させられた家老、加藤司書公の善政をたたえ顕彰する花見の会「桜の宴（うたげ）」が四月七日、福岡県宮若市脇田の脇田公民館で催された。

地元の人々で組織した「実行委員会」の主催。同地区、春の恒例行事で今年は七回目。百人を超える人たちが参加した。有吉哲信市長はじめ市幹部、市議会議員、司書公の菩提寺「節信院」（福岡市博多区御供所町）の前住職夫人、加藤芳子さん（90）も招かれ出席した。

宴は同地区の和太鼓グループ「司書太鼓」の「山紫水明」の演奏でスタートした。司書公の生涯を表すような強いリズムと悲しげなリズムが会場を包んだ。ほかに三曲が披露された。

この後、地元の文化サークルの日舞や剣詩舞など多彩な芸が披露された。参加者は、司書公に思いを馳せつつ酒肴を楽しんだ。

幕末、脇田地区の犬鳴（いぬなき）山系西山の中腹に、開国を迫る外国軍艦の福岡城攻撃に備え、司書公の進言で福岡城の隠し城「御別館」が築造された。築造に際して、司書公は地域の産業振興にも力を注いだことから人々は司書公を慕い、その心情は現在も続いている。

「御別館」は現在も跡が残っている。同市は、観光資源化を目指し、脇田地区では、壊れた城の石垣の修復を目指して募金活動を展開している。

# 30年ぶりの里帰り展

## 玄界島で福岡市博物館

福岡市の博多港から北西に洋上十八キロ。福岡藩勤皇二烈士の墓がある玄界灘の離島、玄界島（同市西区）で、三月十、十一の両日、福岡市博物館の〝出前博物館〟が開かれた。

市博物館は、約三十年前、漁業の島、玄界島の調査を実施し、資料収集や島周辺の海底調査などを行っている。それらの資料を展示した「三十年ぶりの里帰り展」というわけだ。

玄界島は平成十七年三月二十日の福岡西方沖地震で壊滅的な被害を受けた。その後、集合住宅の建設などで目覚ましい復興を遂げたが、島の人々の生活様式も速い速度で大きく変わっている。

展示品や調査時の解説を聞く玄界島の人たち

市博物館は、かつての「島のくらし」を現在の島の人々に思い出してもらい、知ってもらおうと「玄界島の記録と記憶」展として企画。島の人が福岡本土まで出かける負担をなくして、現地に博物館が出かけてゆく形式にした。

会場の「玄界島集会所」には玄界島を示す各種の古地図をはじめ、手製のワカメ整形器、箱めがねなどの漁具、「カナギ網鑑札」、また海底考古学調査で収集した陶器などが展示された。日本民芸協会理事だった故、野間吉夫氏撮影の昭和三十年代の玄界島の写真十点も展示された。

大勢の人が会場を訪れた。島の古い風景写真に知人の姿を見つけ、歓声が上がる場面もあった。

墓がある二烈士は堀六郎と齋田要七。政変で朝廷を追われ大宰府に在った五卿を、幕府が大坂に移そうとしたのを強固に拒んだため、慶応二年、玄界島に流され斬首された。島の人たちが慰霊を続けている。

### 訃報

**浅野　秀夫氏**（あさの・ひでお＝元、一般社団法人玄洋社記念館理事）五月七日、病気のため逝去、九十五歳。

**岡　信宏氏**（おか・のぶひろ＝元、社団法人玄洋社記念館理事）五月二十四日、病気のため逝去、八十五歳。

# 玄洋社関係史料の紹介

石瀧　豊美

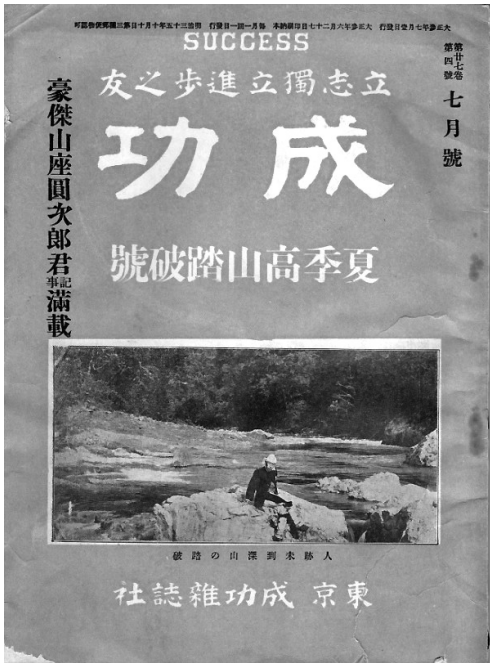
第73回

## 同時代から見た頭山満 ⑰

### ー書と人物ー

頭山満の伝記は何種類もあるが、最も古いと思われるのが吉田俊男著『天下之怪傑　頭山満』である。発行所は成功雑誌社（東京市本郷区）、発行日は明治四十五年（一九一二）六月十八日。

成功雑誌社は『成功』という雑誌を発行していたところで、私は何冊か所持している。その内、二七巻四号（一九一四年七月）は福岡出身の外交官で、玄洋社員でもある山座円次郎を特集している（**写真**）。水野錬太郎（貴族院議員）「支那公使山座円次郎君青年時代」など四本が掲載されていて、広田弘毅（外務省書記官）も「山座円次郎君の性格」を寄せている。




『成功』表紙に「立志独立進歩之友」と刷り込まれている通り、立身を夢みる青年のガイドブックとでも言うべき性格を持っていて、その一環として社会的に成功を収めた人物を紹介している。頭山の伝記を発行したのも、そういう背景からであり、「快傑」ではなく「怪傑」ではお手本になりそうにないが、明治四十五年（大正元年）は辛亥革命の翌年で、この本の終わりの方には頭山満が革命勃発を聞いて中国（当時は清国）に渡ったことが書き留められている。孫文の信頼する頭山満はいったいどういう人物なのか、世の関心を引いていたので、その要望に応えた本と言えるだろう。今なら「緊急出版」と銘打たれているようなものだ。一部を引くと、

「抑も頭山満が、清国へ赴いたのは、我政府の依頼でもなければ、中清革命党首領の招致でもない。溯って考えれば、怪傑結社の玄洋社は、国家的問題に参与するのを主旨として居る。今度の隣邦変乱、否東洋の大事件を耳にしては、いかで黙して居らるべきである。従って頭山と一心同体とまで謳われて居る、玄洋社長進藤喜平太を始めとして、有数の社員は、是非首領頭山満をして、起たせんものと、只管（ひたすら）希望して居った。又怪傑頭山としても、かかる有事の場合に、悠々として起臥して居る訳には行かん。そこで十二月二十三日というに【革命勃発は十月十日】、蹶然東都を辞して、清国へ赴いたのである。五十有余年【数えで五十八歳】、内地より一歩も足を踏み出したことのない怪傑の渡清は、国家に尽瘁せんとの熱誠に外ならなかったのである。頭山愈渡清となると、玄洋社連は、我も我もと怪傑に伴い、活動したいものじゃと豪傑共の意気、天を突く概があった。頭山は、若し俺が清国への行掛けに、筑前に寄ったら、玄洋社の物共が、ワイワイ附随するに違いあるまいと、同地には赴かず、門司に足を止めた。そして同地で頭山精選の配下、浦上正孝、三浦作次郎、及川陸軍大尉、外に医官並（ならび）に従者を引連れ、一行十余名、進藤喜平太、大原義剛、筒井亀来（頭山実兄）等無数の人に見送られ、上海行の便船に投じた。渡清中の費用数万円は、九州の炭鉱王、安川敬一郎、貝島太助等の有志が出金に係ったものである。」（二〇九～二一〇頁）

頭山満渡清の報に「孫逸仙【孫文】・黄興等は、早速怪傑訪問に出掛けて来た。頭山は茲に親しく、孫・黄と会談した。両氏は嘗て我国に渡来し、頭山に逢い、いたく怪傑の人格を敬慕し、以来彼を師と仰いで居った位だ」と続く。

これらはまさに目の前で進行中のことが詳しく書き留められているわけで、今日では貴重な情報となっている。三浦作次郎は美和作次郎の誤りである。

『頭山満翁正伝（未定稿）』（葦書房、一九八一年）によって同行者を確かめると、

「十一月犬養【毅】先発し、翁は十二月二十三日、古島【一雄】、美和【作次郎】、浦上正孝、松平康国、柏原文太郎、藤井種太郎、柴田麟次郎、岡保三郎、小川運平、中野正剛、山本貞美（倬也）等を随えて東京を出発して上海に向った。」（二四七頁）

とある。若き日の中野正剛が加わっているが、『天下之怪傑　頭山満』では十把一絡げの扱いになっているのが逆におもしろいところだ。山本倬也は玄洋社員名簿では「頭山満翁秘書」となっている人物。

（次号に続く）

◆

**筆者紹介**　一九四九年八月福岡市生まれ。佐賀大学理工学部物理学科中退。福岡地方史研究会会長。平成二十四年度福岡市文化賞受賞。『玄洋社・封印された実像』（海鳥社刊）など著書、論文多数。